

## 移住者とその暮らし

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 杉崎 日奈子  |
| 雑誌名 | 金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書   |
| 巻   | 36  |
| ページ | 98-108  |
| 発行年 | 2021-03-31  |
| URL | <a href="http://doi.org/10.24517/00064088">http://doi.org/10.24517/00064088</a> |



## 9. 移住者とその暮らし

杉崎 日奈子

1. はじめに
2. 南砺市の近年の移住者動向
3. 南砺市の移住促進のための取り組み
4. 五箇山地域への移住者
5. 考察
6. おわりに

### 1. はじめに

地方への移住が近年注目されていることから、「移住・定住の促進」のための取り組みや移住者の生活について興味を持った。本章では、五箇山地区または南砺市における移住者について取り上げ、近年の移住者の動向や五箇山地区が含まれる南砺市の移住促進のための取り組み、五箇山への移住者の暮らしについて述べる。研究の手法は、五箇山地区や南砺市の住民や役員職員を対象にした聞き取り調査と、文献調査を用いた。

### 2. 南砺市の近年の移住者動向

まず、移住者数について考察する。表1を見ると、南砺市への移住者数は年間約100組ほどであり、平成27(2015)年度に少し下がったものの、その後は年々増えていることがわかる。また、平成26(2014)年度から平成30(2018)年度の過去5年間の、移住者数の年間平均は98.6組193.8人で、1組につき約1.97人の計算となっている。表2の年代別でみると、平成29(2017)年度、平成30(2018)年度のどちらも20歳代～30歳代の移住者が多く、平成29(2017)年度は全体の約8割、平成30(2018)年度は全体の約7割を占めている。

表1 年度別移住者数  
(平成26年度～平成30年度)

| 年度     | 組数<br>(単位：組) | 人数<br>(単位：人) |
|--------|--------------|--------------|
| 平成26年度 | 95           | 190          |
| 平成27年度 | 86           | 170          |
| 平成28年度 | 98           | 189          |
| 平成29年度 | 102          | 203          |
| 平成30年度 | 112          | 217          |
| 合計     | 493          | 969          |

表2 年代別移住者数(単位：組)  
(平成29年度～平成30年度)

| 年代  | 平成29年度 | 平成30年度 |
|-----|--------|--------|
| 20代 | 42     | 43     |
| 30代 | 45     | 39     |
| 40代 | 8      | 18     |
| 50代 | 4      | 6      |
| 60代 | 3      | 4      |
| その他 | 0      | 2      |
| 合計  | 102    | 112    |

出所：南砺で暮らしません課への聞き取り（2020年12月18日）

また、地区別でみると、最も人気なのは福野地区で、移住者の半数が移住先として選んでいることがわかる。対して、平・上平・利賀地域を合わせた五箇山地区への移住者は全体の3%であり、移住者がとても少ないことがわかる（図1、図2）。

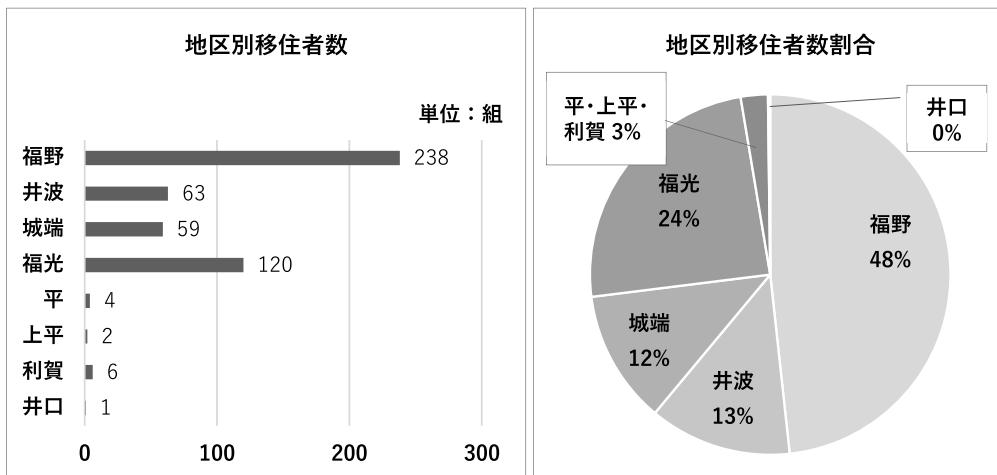


図1：地区別移住者数

(平成26〔2014〕年度～平成30〔2018〕年度)

図2：地区別移住者数割合

(平成26〔2014〕年度～平成30〔2018〕年度)

出所：南砺で暮らしません課への聞き取り（2020年12月18日）

次に、出身区域別でみると、富山県内では砺波市、高岡市、富山市の順で移住者が多く、砺波市は富山県出身の移住者のうち約39%を占めていることがわかる（図3）。出身都道府県別では富山県が全体の約60%を占め、県外からは石川県、東京都、大阪府の順で移住者が多い（図4）。

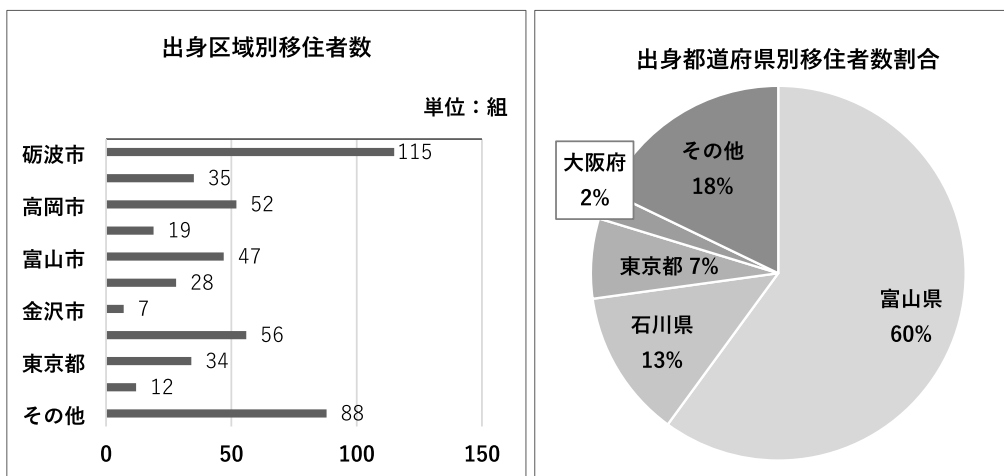


図3：出身区域別移住者数

(平成26〔2014〕年度～平成30〔2018〕年度)

図4：出身都道府県別移住者数割合

(平成26〔2014〕年度～平成30〔2018〕年度)

出所：南砺で暮らしません課への聞き取り（2020年12月18日）

以上のことから、南砺市への移住者は、県内の近場の区域から移住してくる 20 歳代～30 歳代の若者夫婦が多いということが窺える。

### 3. 南砺市の移住促進のための取り組み

#### 3.1 移住に関する助成金

南砺市では、移住支援制度として「南砺市定住奨励金」と「南砺市民間賃貸住宅居住奨励金」がある。賃貸住宅居住者にも補助金が出るため、初めから定住を決めていない人であっても、家を購入する前に一度賃貸住宅で暮らし、いろいろな地域を見てから住宅を購入することができる。

##### 南砺市定住奨励金

| 条件                   | 支援額                               |
|----------------------|-----------------------------------|
| 転入奨励金<br>(市外からの転入世帯) | 新築 100 万円+家族加算 (1 人 5 万円 ※申請者を除く) |
|                      | 中古 60 万円+家族加算 (1 人 5 万円 ※申請者を除く)  |
| 持ち家奨励金<br>(市内での転居世帯) | 新築 30 万円                          |
|                      | 中古 10 万円                          |

##### 南砺市民間賃貸住宅居住補助金

| 条件                               | 支援額                     |
|----------------------------------|-------------------------|
| 市外からの転入世帯                        | 1 万円／月 (1 年間)           |
| 市外からの新婚世帯                        | 2 万円／月 (1 年間)           |
| 市外からの学生世帯                        | 2 万円／月 (2 年間 / 高校生は対象外) |
| 市内の新婚世帯                          | 1 万円／月 (1 年間)           |
| 民間賃貸住宅入居前に山間過疎地域に<br>居住していた高校生世帯 | 2 万円／月 (3 年間)           |

出所：南砺市移住ガイド なななんと「住まいの支援」

次に、それぞれの補助金の年代別交付者数を見てみる。南砺市定住奨励金では最も多いのが 30 歳代である。交付者数は、次に多い 20 歳代交付者数の 2 倍以上となっており、割合で見ると全体の約半数の割合を占める。また、20 歳代～30 歳代を合わせると交付者数全体の 7 割以上を占めている (表 3、図 5)。

民間賃貸住宅居住奨励金では最も多いのが 20 歳代である。しかし、次に多い 30 歳代の交付者数との間に大きな差はないことがわかる。また、20 歳代～30 歳代を合わせると交付者数全体の 7 割以上を占めている (表 4、図 6)。

以上のことから、どちらの補助金も若者向けのものであるが、定住奨励金では 30 歳代が最も多く、民間賃貸住宅居住補助金では 20 歳代～30 歳代が多いことから、定住を決め、マイホームの購入を検討し始める世帯は 30 歳代の若者が多いということがわかる。

表3 年代別定住奨励金交付者数  
(平成26年度～平成31年度)

| 年代  | 組数<br>(単位:組) |
|-----|--------------|
| 10代 | 0            |
| 20代 | 51           |
| 30代 | 119          |
| 40代 | 33           |
| 50代 | 18           |
| 60代 | 13           |
| 合計  | 234          |

出所: 南砺で暮らしませんか課への聞き取り (2020年12月18日)

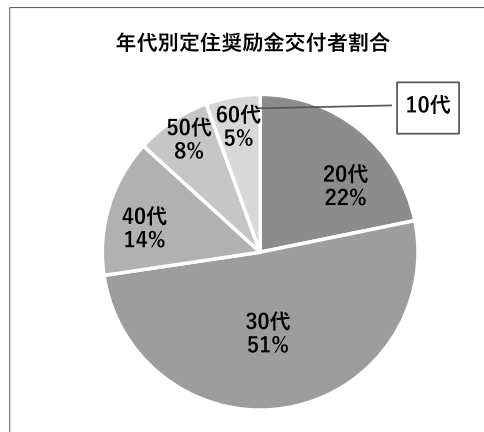


図5: 年代別定住奨励金交付者割合  
(平成26[2014]年度～平成31[2019]年度)

表4 年代別民間賃貸居住補助金交付者数  
(平成26年度～平成31年度)

| 年代  | 組数<br>(単位:組) |
|-----|--------------|
| 10代 | 3            |
| 20代 | 138          |
| 30代 | 119          |
| 40代 | 35           |
| 50代 | 12           |
| 60代 | 5            |
| 合計  | 312          |

出所: 南砺で暮らしませんか課への聞き取り (2020年12月18日)

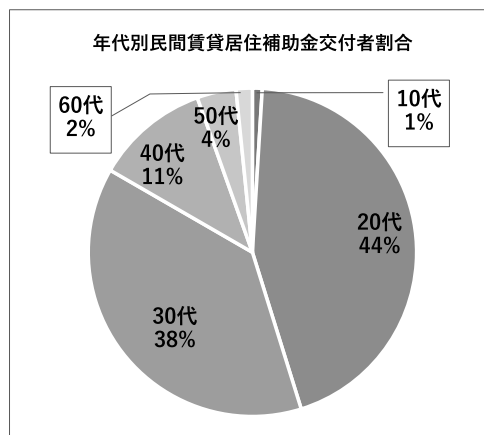


図6: 年代別民間賃貸居住補助金交付者割合  
(平成26[2014]年度～平成31[2019]年度)

### 3.2 南砺市「なんとに住んでみられ」体験ハウス

南砺市では移住希望者に南砺の暮らしを実際に体験してもらうため、家電や家具を備えた、空き家を「体験ハウス」として用意している。居住地は自然環境や生活環境が異なる街中の城端地域と里山の太美山地区の2つのエリアから選ぶことができる。申し込むためには、南砺市役所「南砺で暮らしませんか」へ利用の2週間前までに借用申請書を郵送する必要がある。書類審査に通過すると、住宅貸付承諾書が送付され、2週間後から2ヶ月先までの期間内で予約ができる。2名以上で1泊以上31泊まで利用でき、

宿泊料は1人1泊1,000円で、小学生以下は無料。住宅使用料、光熱水費（電気、ガス及び水道金）、備え付けの家電製品、寝具類の使用料を含み、寝具類（布団）は4人分を備えてあり、入居希望者は以下の3つの事項を全て満たすことが条件となっている。

- （1）市への移住または定住を希望していること。
- （2）市外に居住していること。
- （3）南砺市暴力団排除条例（平成24年南砺市条例第1号）第2条第3項に規定する、暴力団員等または同条例第6条に規定する暴力団もしくは暴力団員と密接な関係を有する者に該当しないこと。

（出所：「なんとに住んでみられ」体験ハウス「利用資格」）



写真1：城端体験ハウス（街中）  
（出所：南砺市移住ガイドなななんとウェブサイトより抜粋）



写真2：居間  
（出所：南砺市移住ガイドなななんとウェブサイトより抜粋）



写真3：太美山体験ハウス（里山）  
（出所：南砺市移住ガイドなななんとウェブサイトより抜粋）



写真4：ワクノウチ  
（出所：南砺市移住ガイドなななんとウェブサイトより抜粋）

### 3.3 移住体験ツアー

南砺市では、「暮らし丸ごと体験」をテーマにした移住体験ツアーを夏と冬に実施しており、移住希望者と地元住民・先輩移住者の交流機会を設けている。今年はコロナウイルス感染症の影響でオンライン開催であったため、筆者も参加させていただいた。

「Go To 移住 in 南砺市 地域の人とつながる ～移住体験ツアーVol.1  
(オンライン編) 築 150 年の古民家を買っちゃった移住のウソ・ホント～」

- ・開催日程：2020 年 11 月 28 日（土）13:30 ～ 15:30
- ・参加方法：Google フォームから申し込みを行い、参加決定者に送付された詳細メールに記載されている Zoom URL から参加。
- ・費用：無料（通信費自己負担）
- ・定員：10 名（申し込み多数の場合アンケート内容により選考）

（出所：南砺市移住ガイド なななんと「イベント」）

当日は私を含め 7 組が参加し、埼玉県・神奈川県・千葉県・東京都・兵庫県・城端地区（体験ハウス居住）からの参加であった。参加者の年代はばらばらであったが、30 歳代ぐらいの方が多く、2 組は夫婦での参加であった。

セミナーは、移住 4 年目の移住者野田さんの自宅とオンライン中継でつなぎ、なんと未来支援センター移住コーディネーターである林さんが、野田さんに南砺市の暮らしや魅力についてインタビューしていく対談形式であった。野田さんは YouTuber「なつみん」として南砺地域の魅力発信活動を行っていて、旦那さんは就農した新人農家だった。ゲストには南砺市の行政の方々や、野田さん夫婦が南砺市に移住された時にお世話になった先輩農家の方、南砺市の地域おこし協力隊の方も迎えられた。

また、参加特典として南砺市のお土産 3,000 円相当が事前に郵送されており、参加者全員がオンラインで一緒に試食をする時間があつた。お土産はそれぞれの地域の名産品が入っていて、利賀のクロモジ茶・あんぼ柿・五箇山特産干しぼべら・城端名物かや焼き・かきやまが入っていた。また、箱の包み紙には五箇山和紙や合掌造りをモチーフにした紙が使用されていた。

後半の質問コーナーでは、野田さんや南砺市の行政の方々や地域おこし協力隊の方々を含め、参加者全員が 2～3 人のトークルームにランダムに振り分けられ、私は「南砺で暮らしません課」の方とお話しすることができた。

その方によると、「南砺で暮らしません課」は平成 22（2010）年に誕生しリアルツアーやオンラインでの相談会で年間約 100 組の移住者を案内しており、そのうち 30～40 組を体験ハウスに受け入れているとのことだった。

移住者のメイン層は、結婚後子供を出産した 30 歳代の方々と、子育て環境を変えた



いという理由で移住を望む人が多いという。次に多いのはシニア層で、定年間際か定年を迎えた 60 歳代とのことであった。いずれも都心部の方が多く、地方の移住先を探している中で縁があって偶然南砺市を見つける、といった人がほとんどであるとのことだった。そのため、初めから南砺市を志望する移住者は少なく、ネームバリューがまだ低いことが課題であるということであった。

移住先として人気のエリアは福光で、山間部にも市街地にも行きやすい立地条件と空き家を引き渡してくれる所有者が多いことが理由であった。対して五箇山地区は山間地域であることと、空き家を引き渡したい人が少ないため、移住者は少ないとのことだった。

「南砺で暮らしません課」には空き家を所有する人たちが相談を寄せてくることもあり、「ずっと守ってきた家を自分の代で手放していいものか迷っている」という内容が多いということだった。富山県は浄土真宗の振興地域で、昔の家は一家に一台仏壇があった。空き家を手放すことを考える際に、仏壇自体は資産にならないことはわかっているが、気持ちの面で気後れするという人が多いというのが現状であるとのことだった。

現状の移住促進の課題として、コロナ下で対面での相談ができない中、移住希望者との相談を密に取れていないのが問題となっているとのことだった。一方で、オンラインツール活用の促進が進んだことで、実際に現地で会わなくても相談を繰り返し行うことが可能となり、アフターコロナを見据えた新規相談者の増加が見込めるといったメリットもあるとのことだった。



写真 5 郵送された南砺市のお土産  
(2020 年 11 月 28 日、筆者撮影)



写真 6 使用されていた包み紙  
(2020 年 11 月 28 日、筆者撮影)

### 3.4 世界遺産に住まんまい家（け）プロジェクト

富山県南砺市にある、世界遺産・相倉合掌造り集落は、遺産に登録されてから 15 年以上が経過し、集落内の人口減少、少子高齢化の進展などがあり、この世界遺産である合掌造り集落を維持していくことが困難になりつつあった。そこで、相倉集落在住の若者で「世界遺産に住まんまい家プロジェクトチーム」を結成し、相倉区、(財)世界遺産相倉合掌造り集落保存財団、南砺市（文化・世界遺産課）と協議の上で、空き家とな



っていた市有家屋、旧高田家（屋号「七平（しちべい）」）の居住者を募集した。プロジェクト名の「世界遺産に住まんまい家」は、富山弁の「住まんまいけ（＝住みませんか・住みましょう）」と「家」を組み合わせた造語である。

旧高田家（屋号「七平（しちべい）」）は木造瓦葺 2 階建て家屋で旧所有者から南砺市に寄贈され、財団法人世界遺産相倉合掌造り集落保存財団が管理者になっている。家賃は 1 か月 10,000 円で、敷金・礼金は不要。町内会費は半期で 12,500 円となっている。希望があれば家庭菜園が無償で貸与される（60 m<sup>2</sup>程度）。受付は平成 24（2012）年 10 月 10 日から 11 月 22 日までの期間で行われ、全国 54 組からの応募の中から、一次選考、現地見学・体験交流、最終面接の後、平成 25（2013）年 2 月下旬に当選者が発表された。入居希望者は以下の事項を全て満たすことが条件となっている。

- （1）原則として単身でなくご家族で入居していただける方（単身の方も応募可能ですが、複数の申し込みがあればご家族連れの方を優先します）。
- （2）年齢（申込者の）が平成 24 年 10 月 1 日時点でおおむね満 20 歳～満 45 歳の方。
- （3）相倉の行事（春祭り・草刈り・寄合など）に理解・関心を示し、積極的に参加していただける方。
- （4）住宅のみならず集落全体が文化財（史跡）であることを理解し、その保存・維持・継承に協力していただける方。
- （5）冬期の住宅の維持管理（屋根雪下ろし・雪の除排雪・雪囲い等）方法を理解・習得し、実行していただける方（業者に委託する形でも可）。
- （6）住宅に出来るだけ長く居住して頂ける方。
- （7）居住可能日（平成 25 年 3 月 1 日）より 3 カ月以内に居住場所を現地に移すと共に住民票を南砺市に移し、生活をスタート出来る方。
- （8）地方税などを滞納していない方。
- （9）連帯保証人を二名用意できる方。
- （10）申し込み者又はその同居人、もしくは同居人の親族が暴力団員でない方。

（出所：「世界遺産に住まんまい家プロジェクト」の「入居（応募資格）」）

この条件から、このプロジェクトの目的が、人口減少・少子高齢化が進んでいる相倉集落を活性化させることであり、若い移住者を呼び込み、地域行事への参加や集落の維持・保存に協力してもらうことを期待しているといえる。

#### 4. 五箇山地域への移住者

本節では、上記の移住制度のうち、「世界遺産に住まんまい家プロジェクト」や体験ハウスを実際に利用した移住者の方々の、移住のきっかけや移住までの経緯、移住後の生活について取り上げる。

##### Aさん（女性、30歳代、相倉、茨城県出身）

「世界遺産に住まんまい家プロジェクト」の当選者。移住前は千葉県で小学校の教員として勤め、夫と娘と茨城県のマンションに住んでいた。しかし、東日本大震災を機に仕事中心の生活に疑問を抱くようになり、家庭を第一にできる生活環境を強く望むようになった。また、それまで住んでいた所は近所づきあいが少なく、地域で子供を育てるという環境ではなかったため、「子育てをするなら地域みんなの顔を知っていて、みんなで声をかけ合える環境に住みたい」と思うようになり、このプロジェクトに応募した。書類選考や見学会を経て、最終的に住民の人たちに選ばれ、2013年5月に相倉に移住。自分で田舎を探して土地と建物を買うとなるとハードルが高くて諦めていたと思うが、このプロジェクトは受入体制が整っていたため、すんなりと新生活を始められた。

今は家族みんなで朝晩のご飯を食べ、雪かきや畑作業も協力してやっており、夫が職場で働いている姿を子供たちに見せられるのもいいことだなと思っている。また、以前は「Aさん」「〇〇ちゃんのママ」と呼ばれる付き合いがほとんどだったが、ここでは下の名前で呼んでももらえることも嬉しい。家族で過ごす時間が増え、家族とより仲良くなれただけでなく、地域の方々とも仲良くなり、雪はすごく大変だが移住して良かったと感じている。また、2014年の春祭りには、娘が獅子舞に参加したところ、相倉で子供が獅子取りをするのは15年ぶりで、女の子は初めてだった。これからは、山菜採りや登山など、ここでの生活をもっと楽しみながら、この地域の文化を受け継ぎ、同世代のみんなで相倉を盛り上げていきたいなと思っている（出所：南砺市移住ガイド なななんと「移住者の声」）。

##### Kさん（男性、30歳代、箆渡、神奈川県出身）

南砺市箆渡集落に来て4年目。プロジェクトに妻が応募したことが移住のきっかけ。最終審査には落ちたが、申込時に「相倉以外の地域に空き家があったら、移住を希望しますか？」というチェック項目に印をつけたところ、その候補に選ばれて、2件ある空き家のうちの1件に住むことになった。

ここに来る前は、沖縄の石垣島に約8年住んでいた。沖縄には子どもが多かったが、五箇山には子どもが少ない。今回の移住は、「子どもを必要としてくれる地域に住んで少子化に貢献したい」という思いが、最大の動機だった。引っ越し時に1番大変だったのは、家財の運搬。前例がなかったのか、引っ越し屋に見積もりを断られたため、五箇山でも使えそうな車を買って家財道具をぎゅうぎゅうに積み込み、東京までフェリーで運んだ。空き家は、すぐ生活できる状態だったが、五右衛門風

呂は沸かすのに時間がかかり、温度調節ができないので、ユニットバスにリフォームした。

ここに来て最初に驚いたことは、すぐ仲間に入れてもらえたこと。沖縄の時に住んでいた地域は、よそ者は地域の集まりには入れなかったもので、いきなり獅子の練習に呼ばれた時は、すごく嬉しかった。獅子の練習の他にも、田植え上がりの温泉や新年会など、集落内での集まりが頻繁にあり、そういった場所でお酒を飲み交わす間にだんだん仲良くなることができた。今も集落の人たちに対しては、「こんなことまでしてくれるんだ」と思うことばかりで、何不自由なく暮らせている。そんなふうにとのつながりを深められているのは、地域の会社に勤めているため、会社のメンバーが地域の消防団のメンバーと同じことも大きかったと思う。また、集落内には同じ時期に、もう1つの空き家に移住された同世代の方がいるので心強い。昔からスキーが好きなので雪は苦どころか、テンションが上がる。冬の日曜には、勤務先のスキー場に子どもを連れて行くことも多い。子どもたちも雪のある環境を楽しんでいる。これからは、五箇山に子どもが増えるような活動に携わることができたらいい（出所：南砺市移住ガイド　なななんと「移住者の声」）。

#### **Tさん（男性、30歳代、猪谷、千葉県出身）**

「山暮らし」を体感してもらおうと、自宅の一部をゲストハウスとして経営している。宿泊者は海外観光客が7割で、東京・大阪・京都など主要都市をすでに訪れ、「日本のカントリーサイド（田舎の生活）を感じたい」という人が多い。元アウトドアショップ店員で、移住前は休日になると友人と片道3時間かけて山へ遊びに行っていた。また、以前転勤で北海道に住んでスキーやスノーボードが好きになったこともあり、雪が降る地域で山暮らしをしたいと思うようになった。

移住を決断したきっかけは、2011年の東日本大震災。放射能の影響を身近に感じ、安全な場所に住み、自分で作った食べ物を口にしたいと思った。移住地は、奥さんの仕事のつながりのある富山県を考えていたところ、有楽町で開催された「とやま暮らしセミナー」で出会った先輩移住者がきっかけで五箇山に住む決心をした。その際、地域の人に受け入れてもらえるかどうかは全く考えておらず、住みたい場所優先で選んだ。

ただ、実際に住むとなると、家探しはかなり難航した。1年限定で体験ハウスだった民家を借りることになったが、そこにはハクビシンが棲みついており、捕まえて熊肉料理屋「高千代」にもっていったことがきっかけで、空き家になっていた今の家を紹介してもらった。その家は元民宿の古民家でとても広かったこともあり、せっかくならゲストハウスを開こうと決意。素泊まりが基本の「ゲストハウス」という形にすることで、食事の際は外に出てもらい、五箇山の地元料理を楽しんでもらおうと思った。

移住してきてよかったと思うのは、お金との適度な距離感があること。都市は何

でもお金で買えるが、お金がなければ何もできない。この人たちは自分の手でものを作り、壊れたものは直して使う。生きる力が強いと感じた。移住はメリットしかなかった。大変なことをしいて挙げるなら、毎日やることがあって忙しいこと。田舎では仕事と生活の境目がなくなる。「お金を稼ぐ＝仕事」ではないということ。ここに住んでみて感じた。今後は、自分たちのゲストハウスを地方移住の入り口にしていくことで、同じような五箇山への移住者を増やしていきたい（出所：Tさんへの聞き取り、2020年11月20日）。

## 5. 考察

南砺市全体でみると、移住者は県内の近場の区域から移住してくる20歳代～30歳代の若者が多いことがわかった。また、南砺市は2つの助成金制度や体験ハウス、移住体験ツアーなど、住まいに関する支援が充実している。しかし、家探しをする過程でネックとなっているのが空き家所有者との問題であり、移住者にとって良い空き家があっても所有者がなかなか手放さないことや、貸し出せる空き家があっても手入れや改造が必要なものばかりであるという点が問題であると感じた。

また、五箇山への移住者は、移住先に「地域とのつながり」や「豊かな自然環境」を求めているといえる。これは、移住前の生活で、都市部の子育て環境の大変さ、災害時の危険性などを身近に感じた経験が影響していたことがわかった。また、彼らは移住後、地域文化の継承や農山漁村の活性化に貢献している。五箇山地区では子どもの数が少ないため、特に子連れの移住者は、伝統行事などへの参加を通して地域との結びつきがしやすい。お祭りなどの伝統行事は、移住者を含めた幅広い世代の交流の場としても重要であるが、コロナウイルス感染症の影響で開催が厳しい状況が続いている。地域のお祭りや移住ツアーなど、地域イベントの活性化が、若者の移住者を増やし、移住者が地域に溶け込みやすい環境をつくるために最も大切な要素となるのではないか。

## 6. おわりに

今回の調査では南砺市の行政の方や五箇山地区の移住者にお話を伺い、南砺市の移住支援制度や移住者の実態、そして移住のきっかけや移住前と移住後の暮らしなどについて知ることができた。聞き取り調査は初めてで、知らない土地で自らテーマを設定してお話を伺いに行くという経験はとても貴重な機会となった。この実習を通じて、疑問に思ったことについて主体的に調べ分析する力、目的を決めて段取りをしていく力が培われたように感じる。最後に、このご時世にもかかわらず、本調査に快くご協力いただいたすべての皆様に心より感謝を申し上げます。